

五山文學と閑吟集歌謠

吾 郷 寅 之 進

Toranoshin ACÜ: The Japanese Zen-Literature and Ballads in
Kangin Anthology

1

閑吟集の編纂と五山文学の教養とが関係の深いことについては既に浅野建二氏が注目された所であり(『閑吟集編者攷』)、私も亦嘗て論じた事があるが(『閑吟集成立に関する若干の問題』⁽¹⁾)、それらの論文は主として閑吟集編纂についての立論就中漢文序と五山文学との関係についてであつた。浅野氏以前には閑吟集と五山文学との関係は、想像はされたけれども(志田義秀博士「室町時代の小歌と閑吟集」)、具体的な実例による考察はなかつたようである。私は、閑吟集序文に於ける五山文学の影響即ち編纂者の教養のみでなく集中の歌謠にも著しく五山文学の影響があることに注目して以前にも之に關聯した考察を述べたことがあるが(『百年不易滿無虧強弓』、『舟行けは岸移る』の小歌⁽²⁾)、以下の小稿に於いてやゝ詳しく之を報告考察しようと思う。⁽¹⁾ (各節冒頭の歌謠の頭に附した番号は岩波文庫閑吟集に施された番号である。)

2

9、只吟可臥梅花月 成仏生天惣是虚

この歌は禅の虚無思想をうたつたものであるが、下句に於ける生天も成仏も空虚であるというのは、涅槃も生死も、更には世間一切の事がすべて空であるとする思想であつて、わが五山の詩文に多く見られる所である。

世間万事総は空(明極楚俊)

大道從來無授受 自是先賢大張口 祖祖相伝総は虚 授手何曾有(同上)

末後句須子細 念念願超生死事 世間万種総虚花(全上)

事不関懷与世疎 可曾著意利名途 細思善亦冥中業 成仏生天底用図(全上)

涅槃生死 惣は仮名(懶室漫稿)

生天成仏真兒戯 日上扶桑万国明(全上)

昨日捏聚虚空作五蘊 即心悲 畢竟不是心 今朝打破五蘊成虚空(天陰語録)

生天成仏 竊笑靈運之詞⁽³⁾ (全上)

謝家兄弟有誰抗 文物風流共雁行 成仏生天皆

是夢 不唯芳草繞池塘(冷泉集)

上記引例の中、最後の二首は溯つては蘇東坡の次の詩等の影響によるものであらう。

使君那眼日參禅 一望蒼林一悵然 成仏莫教靈運後 著鞭從使祖生先(皮州入境図)

(東坡が五山文学に大きな影響を及ぼしたことについては既に述べた事がある。⁽⁴⁾)

勿論生天や成仏が常に虚無的に否定的にのみ用いられるとは限らない。桂川地藏記の

作地藏像燈籠供養胆礼讚歎 是人居娑即得十種利益 何等為十 一者土地豐樂 二者家宅永安 三者先亡生天

の如きは肯定的な思想であつて、之と同様の例が他にもある。

昔迦葉尊者一日乞食 不損貧富 平等乞食 路中逢一女人 見尊者行乞 廻起念思身辺更無可有 唯彼器中有湍汁 拳手奉獻 尊者受施 訖廻騰空 現十八变相 女人即得生天(仏光国師語録)

黄葉斷際禪師云 一子出家九族生天 若不生天 諸仏妄語(延宇傳燈録、希庵玄密禪師)

今日孝女造像供養 先妣生天成仏 信心不二 有甚疑猜 諦聽々々 善哉々々(翰林胡芦集)

併し禅家の思想としては、「生天」や「成仏」の語は、前の例や次の例のように、空無を説き又は否定的論理による場合に用いられるのが普通である。

生天成仏閑君思 灯雨吟詩瘦十分 有力秋風吹不払 胸間錦起斷山雲(清庵詩文)

再び冒頭に掲げた閑吟集の詩に立帰つて考えるに、その下句は上句の理由として述べられているのである而して上句の淵源をなし又は之と關聯ありと思はれる詩句は次の如く多い。

不遠三千里来参八十翁使須陪款款何事去匆匆。旧隠梅花月新吟桂子風 東山如有問臥病半雲中。(空華集)

風流君尚在 靈路意逾長 一住金華後 重遊洛水陽 梅花吟処月 楊柳別時霜 驚喜投詩至 驪珠照我傍(雲棲猿吟)

鸚友營巢伴鷺朋 風波漂卵夢說々 蚌胎菩薩若攀

例 中有梅花樹下僧（江西）

聞說青雲夏賜氷 村家何以避炎蒸 北窓高臥
天將雪 自謂梅花樹下僧（全）

少少耽吟老不能 誦君佳句剔寒燈 近來此道奔如
土 罕見梅花樹下僧（續琴詩集）

その他類似の詩は多い。さて生天も成仏も虚であり夢であるとして唯梅花の月（自然の風物）に吟ずべしという如き思想は前に引いた「生天成仏閑君思」の詩にもよく現われている。尙此の詩は元祿年間成立の「志不可起」には第三及び第四句が、「秋風不應私陶霧 閑山雖斷起山雲」となつていて、又第一句の「閑君思」には「ワザクレ」と振仮名してある。一休の下記の詩も上記と同巧のものであるが、より一層閑吟集の詩句に近い趣のものである。

玉兔推輪遠九衢 広寒宮殿是吾都 夜深吟 断 梅
花 底 仏法南方一点無。（山村風月集）

上絶攀縁下已昇 本然清浄尽虚空 南方仏法非吾
事 一任寒梅花信風（全）

水流四念不同心 仏界魔界亘古今 寒 窓 風 雪
梅 花 月 酒客弄盃詩客吟（狂雲集）

之等は「梅花云々」はないが

一日無君何以樂 百年有限只須吟（續翠）

の、百年（人生定寿）⁽³⁾ は有限である故に只吟ずべし、とする思想に通ずる。更に進んで「一夜寒窓剪燭談 梅辺風雪旧同多 人生易老只須吟」（狂雲詩藁）の如きにも通ずるものである。以上の諸例から考へるに、閑吟集の歌は、虚無主義から来る芸術的享楽主義乃至利那主義の思想を現はすかとも見られるかも知れないが、実は

不求名利不餐養 隱処山深遠俗塵 歲晚天寒誰是
友 梅花帶月一枝新（寂室）

などと思想的地盤を同じくしたものの特殊な表現と見るべきであろう。即ちその本意は空無観から出た自然愛に在るので、それが一種の逆説的な表現をとつたものと見られる。同じく閑吟集所収の「何せうぞくすんで、浮世は夢よただ狂へ」の歌とは、相似たようで、その思想的立脚地が少し異つてゐる。即ち後者には前者の如き宗教的な嚴肅さや哲学的な明晰さはない。

さて、「只吟可臥」の歌は、今直接の出典を明らかにし得ないが、以上の記述によつて五山僧の作詩の一部であること及びその代表的な思想の現われであるということは疑いを容れないであろう。

3

17 人は嘘にて暮らす世に何ぞよ燕子が実相を談じ顔なる。

この歌の出典と考へるべき詩は下記の如きものであ

る。

雲堦石磴苔粘屐 花落水流山更幽 燕子 梁 間
談 実 相 被人喚作語春愁（南院国師語録）
燕子 飛 來 談 般若 岩前花雨晚曇々（明極
楚俊）

從遠及近 樵唱漁歌 總是深談実相（大覺禪師語
録）

陞臣常憶無為化 梁燕時宣実相談 聖德旁流民被
沢（洛北集）

尽日寥々掩竹房 聽他梁燕說真常 百年活計應如
是 飢有松花困有床（了幻集）

翁々衡口唱還和 盧駘無人分後前 蓮社鐘鳴過醉
漢 松風鼎沸学茶顛 黄鸝紫燕談 禅 日 白
馬赤鳥傳法年 吾命似花触牆落 真如不變又隨緣
（彦龍）

上の諸例のように、燕子は実相を談じ、般若を語り、真常を説き、禅を説くものとみる考へが禅家に共通している。それが更に拡大せられては、樵唱漁歌も総べて深く実相を談ずるものともいわれている。即ち自然万象に、人は実相を観得することができるといのである。所が上掲閑吟集の歌になると、人間への不信が強く出ている。「何ぞよ燕子が実相を談じ顔なる」が主文であるが、主意はむしろ逆であつて、「人は嘘にて暮らす世」を慨嘆しているようである。後句には、聞き馴れた見馴れた五山詩文の常套句が一種の抽象的知識的な興味から添えられたものと考えられるのである。

4

103 清見寺へ暮れて帰れば、寒潮月をふひて袈裟に注ぐ
下句の「寒潮月をふひて」又は之と類似した句は禅
材に於いて慣用のものであつたと見え、

石頭城畔 聴 取 寒 潮 送 月 之 声 唱 款 乃 歌（懶
室漫稿）

瑠 玕 珊 瑚 功 已 成 儼 然 天 竺 古 先 生 莫 言 有 何 梵 音
相 南海波 濤 吹 月 声（蔭涼軒日録）

白髮三生張志和 桃花流水入偈歌 緑囊難裏朝天
夢 夜々寒 潮 吹 月 声（全）

樹々松陰消暑樓 山中守相ト奚裘 寒 潮 吹 度
晴 梢 月 坐我青江三五秋（全）

龍源元是大龍宮 流出曹溪一滴中 闍 闍 羅 雖 屈 俗
弟 宗門徳已屬禪翁 姓於金華洞仙貴 諱与条陵
山主同 面目堂々不遮掩 夜 濤 吹 月 万 松 風
（天陰語録 龍源寺文溪禪師像贊）

等の用例がある。しかし之等は直接の出典ではなく、
下記の詩がそれであろう。

送人之伊州

吾心安処是吾家 不隔京華与海涯 皇極青雲眞夢
斷 寒 潮 吹 月 洒 袈 裟（續琴詩集）

上掲関吟集の歌に於ける「清見寺」は倅宗の名利であり而も風光明媚の興津の地に在るところから

皆雪非山天巖峰 夏寒常住不知冬 東遊若遂作詩
掛 清見寺前三保松 (弦涼軒日録)

やその他の詩文に多く題材としてよまれている。直接の出典たる前託継翠の詩は清見寺をうたつたものではないが、之が清見寺と結びつけられて歌われたものと見える。従つてこの歌は續翠詩の愛読者たる清見寺在住僧が清翠詩の一句に自作の前句を加えて作つたものであろう。如何にも禅家の豪快な精神が雄壯な風景の上に現わされている。此の歌は、文字の上から見れば小歌とも見られるが、むしろ仮名交りにした漢詩と見るべきものであろう。

5

172 一夜窓前芭蕉の枕 涙や雨と降るらん

此の歌は肩に朱註のないものである。小歌に属するものであろう。しかしその前句は明らかに漢詩の仮名交り文と見るべきものであり、後句は純粹の小歌調のものであるが、一首の発想としては浅野氏の挙げられた「落椿詩文」の例、「灯前一夜涙如雨」も同様のものである。そのほかに全じく落椿詩文の「涙雨春無三月晴」、「涙雨蕭々終未乾」、「澗花涙雨蕭蕭如綿」、「瀟瀟涙雨胸中響」や「蕭々涙雨未吹霽」等も涙と雨との類比に於いて同じ趣が見られる。

さて此の歌の前句は

荒村宿竹寒紅 中庭永夜芭蕉雨 半帶
秋風入破窓 (天境)
青燈白髮動臥吟 窓前一夜芭蕉雨 瀟瀟
江湖無限心 (無文)

等に出たものであろう。特に無文の詩は「窓前」と「一夜」との順序が逆になり、「雨」が「枕」となっているが、殆ど同句である。後句は「落椿詩文」の「涙如雨」と同趣のものであるが、正確には

ひとしれす涙や空にくもりつつ秋のしくれとふり
まさるらん (夫才和歌抄13)

等に近く、前句後句併せて、一首は上記の詩や和歌の想を併せ有している。当面の問題として、直接か間接かは断定し難いが、此の歌が五山詩の影響に成るものであるということは断ぜられるであろう。

6

173 世事邯鄲枕 人情灩澦灘。

此の歌は当時どういうよみ方をされたのか明瞭でないが大略の推定はつく。先づ「人情」の語は以下の余情、風情、幽情、実情、感情等諸例に於ける「情」がすべて「セイ」とよまれたことによつて、当時、「ニンジャウ」ではなく、「ジンセイ」と漢音で発音され

たものであろう。

なびき、ふす、かへる、よるなどいふこと葉は、
やわらかなれば、おのづからよせい (余情) にな
るやうなり (花傳書六花修)

いかにもゆふげんなるよせい (余情) たよりをも
とむる所に (全上)

ふるまひふぜい (風情) をばそのものに似すべし
(全二ひためん)

これ万人の見心をしてひとりのかんせい (感情)
へひき入るるきわ也⁽⁵⁾ (花鏡時節感当の事)

当国の人目じちせひ (実情) なく候 (世阿彌自筆
傳書集 休渡より竹苑舊状)

歌舞イウセイ (幽情) の曲味をなし (醫舞髓秘記)
ヨセイ (余情) ことはりとともにしられて (全)

玉をみかき、花をかざすヨセイ (余情)、 (拾玉
得花)

(6)

その他「よせい」、「ふぜい」の例は周知の如く多い。

次に、この詩は直接の出典となすべきものを現在見出し得ないが、大陸に於ける崑山谷の「生涯谷耕 世事邯鄲枕」(薛稷道自南陽來入都留宿作詩錢行)の詩句などが最も古い源をなすものと思われる。いっまでもなく崑山谷や蘇東坡の詩は李白や杜甫の詩と並んで、本邦五山に於ける愛読のものである。此の詩のあらわす思想は最も仏教的のものであつて、同趣の内容の詩は五山詩の中に相当数を見ることができる。

江天晴乍雨 世事窮還哀 烟霧負山去 風沙卷地來
四隅牽詩樹 万里老坡旄 刻画悄然坐 人間灩澦灘 (蘇材胡芦集)

寸歩人間灩澦灘 与君何処此懷寬 古今天地百年内
際会尋常一嘆難 紅葉原林秋色晚 玉梅蘿落朔風寒
猶習渭上尖頭屋 經意論詩寒々看 (心田詩藹)

世路風波灩澦灘 猿身今日喜歸來 何知見雪梅花下
相遇青鸞一笑開 (觀中)

天下文章陸劫灰 誰與其原有公哉 量波渺々雲夢沢
世路難々灩澦灘 今日荒衰只依竹 何時叢叢共吟梅
十年月冷風流事 又被一篇佳句催 (仁如)

莫言巨瀬与灩澦 名位無心一釣竿 浮世艱難皆灩澦
漁人未必涸波瀾 (全)

事業風流年少壯 名家自古出賢才 舟師可戒扁途嶮
聞說南虞灩澦灘 (瑞岩)

不屑龍塘灩澦灘 鯨聞淚迸涸波瀾 縱然東海變桑去
隻袖何時舊底乾 (英甫)

人世尋常灩澦灘 回頭南北是非多 憑君莫話薄懷事
巾上青天腸不佗 (橫川)

平地人間灩澦灘 非君誰使此懷寬 昨宵初

覺小春暖 灑紗窻夢不酸 (全)

多病故人拓不來 門門今度為君開 客窻日月
邯鄲枕 世路風波灑預堆 詩律急驚彪
交虎 鈍根長笑誰聞雷 蕤香且欲相留語 歸夢空
飛白水涯 (空華集)

以上の諸例は必ずしも制作時代順に従っていない
し、又閑吟集成立以後のものをも二首含んでいるけ
れども、之等の詩によつて

上掲閑吟集の歌の成立は略々明らかであろう。「人間」
の註意は勿論謡曲「羽衣」などに於けるそれと同義である。
「灑預灘」は中国の地名で、累塘と相並んで對所
とされた所、正しくは灑預堆であるがわが国では、
主として詩の押韻の関係によるのであろうか、屢々灑
預灘としても用いられている。閑吟集歌の「世事」に
当る「世路」が灑預堆の如きものである、とされる例
は観中、仁如及び空華集等に見られ、之等は閑吟集の
歌に於ける世事邯鄲枕とは逆の配列になっているが、
寛都寺 六旬有九客人 間 大似邯鄲 屋 夢 殘
(大休和尚頌古)

の如きは前者とけ違つ「人間」が邯鄲枕とされている
例である。又上記諸例中新村胡芦峯、心庄詠聲、嵯川
詩等は閑吟集の歌に近く、「人間灑預堆」の例である
更に

足疾經年輟出城 寧知世事与 人情 隨波逐
浪身將老 極草應風計未成 滿眼榮材秋正晚 積
眼一樹雨連明 不才顧我真無用 隻臂扶宗經嘸兄
(空華集)

等によつても、「世事」と「人情」(又は「人間」)
とは対照的対立的な概念ではなく、類似的な概念であ
るから、相互に自由に入れかえられて逆つ配列をもと
られたものと思われる。此の閑吟集の歌は、世事の困
難と人情の峻峻とを脱ぎ仏教的思想のものであるが特
に禅思想的のものというわけではない。しかし前の諸
例によつて知られる如く「世事邯鄲枕 人情灑預灘」
の認識が結論として述べられる場合もあるが、多くは
この前提から進んで禅の特色ある逆説的な思想が示さ
れるのである。従つて此の歌は恐らく五言絶句の前半
又は五言詩の前部であろう。

7

135 千里も遠からず、あはねば咫尺も千里よなふ。

此の歌は岩波文庫閑吟集や朝日古典全書中世説謡集
の頭註等で知られる如く、後世まで小異を加えつつ庶
民の世界に永く又広く流行したものであるが、その源
を溯れば、李白の

楚王神女徒盈盈 高唐咫尺如千里 翠屏丹崖紫
如綺 (觀元丹邱坐巫山屏風)

の詩句であろう。次いで蘇東坡に

近別不忍容 遙別涕霑胸 咫尺不相見 與
与千里同 人生無別離 誰知恩愛重 (穎州初
別子由)

の詩がある。本邦五山に於いては

五雲宮隔隔仙標 咫尺情如千里遙 欲到
洞房復無夢 檐花月白度春宵 (愷室漫稿)
石竹菊花開並時 淚殘恐不耐炎曦 佳人咫尺
如千里 欲寄雙枝倩畫師 (瑞岩)

等の詩があり、熙春の文にも

俄而赴旧梓 別懷倍于餘子 咫尺不見如千里
況又他日水遠山長哉

の例がある。しかし最も流布したのは禅林句集に収め
られてからであろう。之はいうまでもないが、特に仏
教的又は禅宗的思想の故にではなくて、五山に於け
る中国文学の教養の一つの現われとしての詩句が、流
布するうちに庶民の中に入つて、庶民的な柔軟な恋愛
歌謡に化せられたものと考えられる。

8

232 凡て人界の有様を暫く思惟して見ればくわいらい
ほうたうにひかを争ひ待てはいつれの所ぞや、玄想顛
倒夢幻の世の中にあるをあとと思ふらん。

此の歌は周知の如く謡曲「刈萱」より出たものでは
ある。元々謡曲と仏教との関係の密接である事はいうま
でもない。此の曲従つて上掲の歌は仏教思想との関係
に於いて見られる必要のあることは勿論であるが、此
の「くわいらいほうたうにひか」の部分に従平謡曲研
究家にとつても難解の箇所であつたように見えるので
特に五山文学との関係に於いて述べてみたい。

「くわいらいほうたうにひか」に就いては、藤田氏
は岩波文庫閑吟集に於いて「傀儡棚道ひか」とせられ、
即ち「ほう」のみを解して他は未解決のままであつた
が、浅野氏は「ほうたう」を「棚頭」と解決せられた。
同氏の花鏡や禅林句集からの引例は適切である。「ひ
か」に就いて、同氏が之を「彼我または僻の両意に解さ
る」とされたのは小蝦ともいふべきかと思われる。之
は後に挙げる夢窓の語録によつて、「彼我」と解すべ
きものであつて、「僻」とすべきではないと考えられ
る。さて棚頭の傀儡は元來中国に行われた操人形であ
る。之が古くから否定的的人生観を述べるに際して譬喩
的に用いられた。管見に入つた古いものでは黄山谷の
五賊追奔十二宮 白頭寒土黑頭公 明朝一飯充書
籍 安用研桑作老翁 万般尽被鬼神戲 看取人
間 傀儡棚 煩惱自無安脚処 從他鼓笛弄浮生
(題前定録贈李伯福)

の詩がある。かかる詩の影響から本邦五山の詩文には

棚頭傀儡をいうものが頗る多い。それらの中、傀儡そのものを直接興味の対象として詠じたものは以下の詩である。

舞曲自隨歌曲長 鼓声彌与笛声揚 千妖万怪世間事
伴作 棚頭咲一場 (真愚稿)
無心作用軀氣流 游戲神通卒未休 一新來時菩薩面
寸絲去却夜叉頭 (松山集)
一棚頭 上 班全身 或化千侯或庶民 忘却口前真木概
癡人喚作本來人 (一休)

上記はすべて「傀儡」と題する詩である。更に

太上天皇降下宣制 必欲山僧再帰於此 重尋絲線
復整威儀 更打場中鼓笛 再弄棚頭 傀儡 雖
是旧時人 要見新樣舞 (竺僊)
拈華座上笑猶温 情尽寧容一髮存 青布幕中絲傀儡
金香爐下鉄崑崙 群機叶妙微通線 (禪居集)
真王婆揚人不甘 草深一丈復何談 瑞峯也似婆
心切 傀儡棚頭搭戲衫 (空華集)

の如き詩文は稍々異つた仏教的思想を含ませた趣があるが、前引の「傀儡」と題する詩群の趣に近いものである。然るに次の

且道山僧牽引善財所見一絡索 又引諸禪客所問底一絡索
攤在諸人面前 撒在諸人眼裏 布在諸人路頭 又添諸人一重障礙
雖然如此 山僧要緊句子 不曾動著 若是覺裏人 然然自知
若不是覺裏人 矮子看戲難 隨人上下 非但不見棚中之人亦
不見木羅傀儡夢 (仏光)

世途今古幾窮通 万否千難一空 傀儡 棚頭 彼我
蝸牛角上鬪英雄 須知 蚌相持處 終須問 魔考 鞠中
放馬華山待何日 不知 却 覺 城東 (夢窗)

到這裏男相女相五彩虚空 真諦 俗諦 一棚 傀儡
畢竟主宰是誰 (翰林胡声集)

弘仏魔羅 拭真如月 六十九年 傀儡 一概 (祖旭)

拈弄傀儡 滿七十年 末後一句仏祖不傳 (虎溪)

の如きは、明白に人間現世の経営を「傀儡の一概」に喩しきもの、「傀儡棚頭に彼我を鬪ふ」如きもの、或は「傀儡を拈弄する」如きものと観じ、更に進んでは真諦も俗諦もともに「一棚の傀儡」に過ぎないものとするが如き、徹底した禅の虚無的人生観の表現となっている。世阿彌の

生死去来 棚頭 傀儡 一線断時 落々磊々
是は生死にりんゑ (輪廻) する人間の有様をたとへ也 (花鏡)

は、特に「棚頭傀儡」を以て「生死に輪廻する人間の有様をたとへ」たものと説明しているように、前の諸

例と全く同趣のものである。

以上の記述から、閑吟集の歌即ち謡曲「刈萱」の「くわいらいほうたうにひか」は前引 夢窓国師の謡録を直接の出典とすべきではなからうか。その是非はしばらく別として、五山文学に出自を求めることは正しいと断ぜられるであろう。

註1. 本稿は五山文学と閑吟集歌謡との関係について、管見のすべてを盡さず、一部の歌に留めて記述した。残余については別の機会に発表したいと思う。

2. 「国語国文」第20巻第4号。

3. 会稽太守孟顓事佛精懇 而爲靈運所輕 嘗謂顓曰得道應須慧業 丈人生天当在靈運前 成佛必在靈運後 (南史謝靈運傳)

4. 参照拙稿「百年不易無窮強弓」(天理大学々報二・三号)

5. この「花鏡」に於ける「かんせいへひき入る」の「かんせい」に就いては、吉田東伍博士が「感勢」と解せられて、能勢博士川瀬氏等も之に従つておられるが、この解は恐らく異りであろう。

心より出でくる能とは、無上の上ずの申樂に、物数の後、二曲も、物まねも、きりも、さしてなき能のさびさびとしたる中に、何とやらん感心のある所あり。(花鏡、批判之事)

比曲、閑花風是也。比者、古今注云、物を二ならべて何も同様なりと云々。閑花者、閑はにうわなる感心、花はひろでたる色心なり。(六義三)

えみの内のたのしみをふくむと云、是はおもしろくうれしき感心也。(習道書七)

常闇なりし天の下、ほのぼのと明そめける妙心面白のさかひ、言語道断、不思議、心行所滅の感心此時にあり。(歌舞曲題記)

等に於ける世阿彌や禪竹の「感心」は、今日用いられるそれとは意義を異にしていて、「感情」と並置される「感心」である。「感情」は「情に感ずる」とか「情を感じしめる」の意ではなくて、「感ずる情」の意である。それと全様に、「感心」は「心に感ずる」とか「心を感じしめる」の意でなく、「感ずる心」の意である。即ち「情」と「心」とは、今日に於いても一般に「心情」として用いられるように類例語である。従つて世阿彌や禪竹に於ける「感心」なる語から「感情」なる語の存在及び使用は容易に考えられる。能勢博士は「かんせい」に就いて、「感情」とすることも可能であると述べておられるが、之は上記の諸例から考えれば「感勢」ではなくて、必ず「感情」と解すべきものであらう。尙序を以ていえば、

「かんせいへひき入るる」を同氏の口譯には「人の心を深く感ぜしめる所云々」とされておるが、他方

いにしへの役者の上手はたゞ一座のしてのかんをほんとして即座一興の成就をなして、当代までの手本ならずや。（習道書六）

に就いては、全氏は「（上略）一座のシテの氣肖を基準として（下略）」と譯されておる。この部分は上記花鏡の部分と類似した考えを述べた文であるから、「かん」と「かんせい」とは同義もしくは同義に近い語と考えるべきではないか。「習道書六」の「かん」は「一座のシテの感」（シテの感ずる所）である。従つて、「花鏡」の「かんせい」も「シテひとりの感ずる所」であらう。更に上記諸例の「感心」から考えてみても、能勢博士譯に於ける「人の心を感ぜしめる所云々」は「人の心をシテの感ずる所云々」と改めるべきではないだろうか。

6. 川瀬一馬氏校「世阿彌自筆傳書集」には

我より下手をば似すまじきと思ふじやうしきあらば（風姿華傳三）

稽古は強かれじやうしきはなかれ（同）

されば、たゞ人ごとに、或はじやうしき、或はえぬゆへに（中略）是はきらうにはあらず、たゞかなはぬじやうしきなり。（同四）

等の「じやうしき」に「情識」と宛ててあるが、之は能勢博士の「評釈」の如く、「諍識」と宛てるべきところであるから、「情」を「せい」とよむことの反証にはならないであらう。

（1951 .9 .25）